

## 9月紙上例会 武蔵野の野草を考える

さくらそう会世話人代表 鳥居恒夫

18歳で上京して以来65年すっかり東京人となりましたが、まだ雑木林の残る小平市に住みますので、武蔵野の真っ只中にいるという暮らしです。郷里の西三河（愛知県の中南部）からやってきて最初に感じたのは、土壤の違いでした。花崗岩が風化した白い砂質土で育った目には、火山灰土の赤い関東ロームは異質で植生が異なり、風景も違って見えました。平地に雑木林があるのも不思議、ケヤキの林立やシラカシの高垣も見たことのない景観でした。東三河（愛知県の東部）の奥は今では秘境というほどの山国ですが、西三河には開発の進んだ平野が広がり、川の下流に拓けた街中で育ったので、今で云う里山のようなものは近くにはありませんでした。小学生の頃から庭で草花を育て、日曜日には丘陵や川辺、海岸へも出かけて植物を探し、父親が持っていた『牧野植物図鑑』に照らし合わせて、押し葉標本を作ることに明け暮れたことを思い出します。そのとき気がついたのは、植物図鑑にはどこにもあるように書いてある植物が、見当らないことです。例えばイカリソウやヒトリシズカはどこにもなく、中学生になった頃に隣町の山裾の藪でイカリソウの群落を見つけ小躍りしました。全て白花で普遍的な淡紅紫色ではありませんでしたが、これを契機に植物は地域によって様々な変異のあることを知り、植物図鑑は東京を基準に作られていることを理解しました。

このような思い出を振りかえって、武蔵野に生える野草を考えてみました。

### 武蔵野台地の植物

箱根山や富士山の火山灰が堆積した関東ロームの台地には湧水が少なく、雨も多くない地域で水が乏しく、ススキと雑木林の原野であったこの地が本格的に開発されたのは江戸中期とき



キンラン（武蔵丘陵森林公園、多年草、本州～九州）  
れ、雑木を利用した畑作が始まったと聞きます。キンランやギンラン、ヤマユリを始め関東から北日本に共通する落葉樹林の植物が生え、定期的な伐採と冬ごとに行なわれる下刈りによって早春の日射しが地面に届き、樹下の野草類は繁茂しました。

### 丘陵地の植物

多摩と狭山、所々に残る古い地層の丘陵には、古い時代からの植物が残されており、麓には水があるので集落ができ、里山として利用されてきました。代表的な植物はカタクリで、多摩丘陵にはタマノカンアオイがあり、ヤマユリもありました。

### 河川原野の植物

荒川や多摩川の原野には水が流れ、日当たりも良いのでほかとは違った植物が生えましたが、しばしば洪水が起きるので上流から流れてきたサクラソウやノウルシ、チョウジソウのようなものもあり、原野を利用するために野焼きが行なわれたところではそれに適応して増殖しました。一方不安定な砂州では植生は安定せず、破壊と再生が繰り返される中で新しい場所を見つけて存続した植物もあります。

以下代表的な植物について述べることにします。



ヤマユリ 山百合 (武蔵丘陵森林公園。多年草、球根。  
東北～近畿、北海道・北陸・中国・四国・九州にはナシ)

### ヤマユリ 山百合

夏の始め頃に藪の中から大きな白くて斑点のある花を咲かせるヤマユリは、低地を除く全域で見られましたが、今では保護されない限り残っていません。山村では冬に球根を掘って食べましたが、取り尽さないように配慮されていたと思います。大量に掘り取られた理由は別にありました。明治になるまでの日本はユリの国というほどに、様々なユリが全土に溢れていたといわれます。西欧にはない植物だったので、江戸時代にやってきた西欧人の心を捉え、以後大量の球根が輸出されました。中でもヤマユリは大形で人気が高く、採取した球根を畑に植えて肥培し、これを輸出して産を成した種苗会社もありました。種子蒔きや鱗片を植えて増やす方法もありますが、年数がかかるので自生株の採取が進みました。半世紀も前に五日市の山で鋤を担いだ中学生くらいの子供が、籠の中に掘った球根を持っているのを見たことがあり、村の誰かが一つ何円と決めて、子供に小遣い稼ぎをさせているのだと思いました。現金収入のなかった山農村ではこのようことで数が減り、実生株も育たなくなって消滅に向かったものと思われます。

一般の人たちも山でユリの株を見つけると、直ぐに掘り取ったものです。しかし庭に植えた株は2年目にはウィールスに侵されて畸形となり、枯れてしまうのが常でした。

実はユリ類は種子から育てればウィールスの感

染はなく、大量に殖やすことができます。人の手を介すると感染の機会が増えるので、種子を直接自然地に蒔く方法もあります。藪の中に残っている株も周りを下刈りすることで元気を回復し、沢山種子を結んで周辺に株が殖えることがわかっており、保護地ではこのような管理で確実に殖えつつあります。

輸出が途絶えた戦争の時代には欧米では改良が進み、病害に強い園芸品種が育成され、逆輸入されるようになりました。カサブランカという白い園芸品種はその一つで、鉢植えや切花で広く売られています。

雑木林に生えるキンランやギンランも同様で、昔雑木林で必ず行なわれていた下刈りを復活させれば、往時の植生に戻すことは難しくありません。

### カタクリ 片栗

カタクリは北日本の植物で、関東～北陸、東北地方には珍しいものではなく、山裾の落葉樹下ときには杉林にも群生します。山奥にもあるものの人里近くの林で大群生するのは、人間との関係がうかがわれます。

カタクリは郷里の西三河には自生がなく、初めて実物に出会ったのは大井川の西側にある牧の原の藪で、あまりにも大きく育っていてすぐにはわかりませんでした。図鑑や写真ではもっと小さな草だと思い込み、大きさがつかめていなかったのです。2枚の葉に6片の花被からユリ科の植物に違いないと思い、15分くらい考えてカタクリであることに気付きました。詳しい人に教えられない限り、誰も植物との出会いはこのようなもので、こうして出会った植物は生涯忘れることはありません。



開花時のカタクリ 片栗



多摩丘陵長沼公園のカタクリ自生地

せん。

東京ではカタクリの自生は珍しくはなく、多摩地域の丘陵地には連続して大小の群落が存在しました。あのバブルの時代に開発が進み、自然保護の活動も盛んとなると、花が目だって美しいカタクリは保護すべき植物の象徴ともいえるものとなって、各地域で自生地の保護保存が叫ばれました。調布市深大寺の南の自生地は、中央高速道路の建設でなくなることになり、神代植物公園にいた私たちが株を掘り取って植物公園に移植しました。そのころ練馬区北部大泉の白子川に沿った自生地は、私の見た限りでは最も密生した群落で、やがて区の公園としてカタクリの保存が計られるようになりました。多摩丘陵や狭山丘陵、八王子、五日市、青梅にかけては多くの自生地があって、それぞれに地元のボランティア活動で保護され、株が増殖して人気の観察地となったところもあります。自生地に共通するのは古い地層の丘陵地で、武蔵野台地の植物ではないと考えます。東から北向きの斜面にあり、南や西向きのところにはまずありません。それは夏の暑さと乾燥を嫌うためで、北方の植物であるカタクリは寒さには強く、表土が凍りつく真冬には地中深く根茎が休眠しているので、問題はないのです。

多摩丘陵の長沼公園では毎年観察会が開催され、私も現地で観察に立会いカタクリのお話をしました。地元の農家の人の話では、昔はいたるところに生えて大群落となり、人が見に来るわけでもなくそのための手入れもしてはいなかったという。それがどうして少なくなったかといえば、下

刈りをしなくなったことが思いあたると。こうした里山の雑木林は秋冬に下刈りをして焚きつけに、落葉を集めて堆肥とし、20年程の周期で林を切り払って薪炭用に利用したものでした。高度成長の時代が到来して燃料はガスや石油となり、化学肥料に頼って堆肥を作らなくなったことで下刈りが行なわれず、雑木は大木に育ちアズマネザサの藪となって、カタクリやヤマユリなどの野草が日照不足で衰退したわけです。

かつてのカタクリの群生を取戻そうと、毎年冬の間ボランティアの人たちが下刈作業を続けた結果、ササの勢いが弱まりカタクリの株も年ごとに殖え、公開されるようになりました。種子から生えたネギの苗のような細い1本葉の実生苗があちこちで発見できることで、増殖してきたことは明らかですが、花をつける株に育つには8年を要するという観察録もあり、開花した株は養分を使い果たし、再び花をつけるには3～5年の蓄えが必要となるのです。長沼公園は多摩丘陵でも最も勾配の急峻なことで知られますが、斜面にも毎年開花する株が増えてきたことを実感します。

カタクリを観察するには、雑木林にも日光が当たる晴天の日中に限ります。6片の花被が勢いよく反転するからで、中心にある紫色の模様がよく見えます。下向きに咲くので、覗き見ないとよく見えません。ユリの花の中に桜の花が見えますと話していたら、次回には手鏡が用意されました。

武蔵野に広がるカタクリの自生地は、どこもこのような経緯を辿って減少し復活をしました。自然に育つ植物といえども、社会情勢やそこで暮らしを営む人に活動によって減少と増加を繰り返してきた歴史があります。

新潟や東北の山間地ではカタクリは山菜の一つであって、春には採取して食べています。生えている密度が濃く、そこから間引きして採取するので、繁殖が促され消滅することはありません。住む人にとっては大切な資源ですから、なくならないような採りかたの智慧というのが働いているのだと思います。雪国の遅い春のお膳の吸い物に、2枚の葉をつけたカタクリの花が浮かんでいた思



タマノカンアオイ

い出があり、山村では浸し物や、ときには沢山採って乾燥して蓄え、水で戻して調理するといひ、東京人が目を回すような話です。古くには根茎から片栗粉を取ったと伝わりますが、自分で食べるには根茎そのものを食

べた方が手間もかからず、効率の良いジャガイモの澱粉がその名を取ってしまいました。古代人も多くの食べられる野生の植物の一つとして、味わっていたと想像します。雪国では畑の野菜が育つまでの2ヶ月くらいの間、雪解けあとに生える野草を追いかけるように採取して食い繋ぐという暮らしが続いており、これが山菜というものの正体と考えます。

#### タマノカンアオイ 多摩の寒葵

多摩丘陵の藪の中に群生していた植物で、産地が東京と神奈川の北部の丘陵地に限られ、絶滅危惧種指定の小形の多年草です。カンアオイの仲間は全国にあるものの地域的な種ばかりで、薄暗い樹陰に生え、葉も秋から冬に株元に咲く花も地味で目立たず、興味のない人は存在に気づきません。これも古い丘陵地の植物で、神代植物公園に隣接した深大寺の墓地には生えていましたが、武蔵野台地上にはまずありません。高尾山や御岳の山地にもなく、その地域には別種のカンアオイやランヨウアオイが生えているのが不思議です。多摩丘陵で宅地開発が進んだ時期に、沢山あった自生地が消滅しましたが、高幡不動尊の山や、多摩動物公園の林では今も見ることができます。

カンアオイの仲間は地味な花は観賞の対照にされませんが、10cmばかりの楕円形の葉に斑紋のような模様があり、種ごと株ごとに異なることが好事家の目にとまり、収集栽培家があります。江戸時代末期の名古屋では、三重県の鈴鹿山系に生えるスズカカンアオイの中から選抜して栽培

し、細辛と呼ばれて流行した歴史があります。タマノカンアオイでは、そのようなことは起きませんでした。多摩丘陵の丘陵地公園には処々に残っており好奇心を煽らないよう静かに保存するのが良いと考えます。



オドリコソウ

#### オドリコソウ 踊子草

これも丘陵地の半陰に生える株立ちの多年草で40cmほどに育ち春たけなわの頃に節ごとに4~6個の花が立ち上がるように咲き、笠を被って踊る姿に見えます。地方によって白から淡紅紫色までの変異があります。草姿も名前にも情趣が感じられ、春の野草の姉様という存在で一度見たら忘れる人はいないでしょう。北海道から九州、中国にもあり、ヨーロッパには母種に当るものがあり、オランダとドイツで白花の自生種を見えています。植物図鑑にはごく普通に見られるように書いてあるのに、このオドリコソウも私の郷里にはなかった植物で、上京して初めて実見しました。現在都内では自生地が少なく、新宿区にある都立戸山公園（江戸時代には尾張徳川家の下屋敷）の箱根山地区の北斜面に生えているのが知られています。

江戸末期に幕臣の岩崎常正（灌園）が実地踏査に基づいて著した『武江産物志』には、オドリコソウもカタクリも記載がないのが不思議です。練馬から野火止、井の頭、堀の内、目黒。西は多摩川。東は荒川原野の尾久ノ原から市川の国府台、行徳の範囲に存在したものを収録したのですが、産物志なので用途のないものは省かれたのかもしれない。

オドリコソウは山梨県や長野県には広く自生地があり、戸隠中社の宿坊の裏手には、白色の株が大群生していた記憶があります。

カタクリだけでなく、このような植物も植物園や公園内で増殖、保存したいものだと思います。



冬に行われる荒川原野の野焼き

### サクラソウ 桜草

サクラソウについては、以前発表させていただいているので深く触れることは控えますが、江戸という都市の発展とともに考えなくてはならない植物ですからさげられません『武蔵野』第83巻第1号「江戸の花 桜草」。

サクラソウは武蔵野台地の植物ではなく、台地の裾を流れる荒川の原野に同様の湿性を好む野草とともに群生し、春の開花時にはサクラソウの淡紅色とノウルシの黄色が入り交じり、花筵のような景観を見せることから行楽地として人気となりました。元来高原の野草であるので、洪水で流されてきたものが下流に根付いたものと言われ、元の故郷は荒川あるいは利根川の上流と考えられ、江戸開府の頃からの記録にやっと登場する新参加者です。洪水によって上流から流れ着いても原野のままでは定着増殖できませんが、集落ができて河原を利用するようになると冬に野焼きが行なわれ、春には地面に日光が当ることでサクラソウもノウルシも大繁殖しました。原野に生えるアシを刈って編むよし簾は江戸の街では必需品で、農家の生計を助けるものでしたので、野焼きをして質のよいアシを育てようとして、これによってサクラソウの原野ができ、野遊びの行楽地となりました。

寛永時代の荒川の瀬替えによって荒川の流路が定まり、広大な原野が生まれ、尾久ノ原、新田ノ原、浮間原、戸田ノ原が知られますが、梅や桜はともかく、一つの野草の花を見るために大勢の人が訪れたことはサクラソウ以外にはなかったこと



春にはサクラソウが咲く（特別天然記念物、さいたま市田島ヶ原）

と思います。

江戸の街が広がるとともに、サクラソウの自生地は街の近くから消滅して行きます。どうやら災害が起きる度に、その復興のために原野の土が土壁として採取されたのが原因で、荒木田土と呼ぶこの土は粘質が強く、乾くと堅くしまるために最良の壁土用土でした。大正12年（1923）の関東大震災の直後に、浮間原の土が壁土用に採取され、東京都内のサクラソウ自生地は消滅してしまっただけです。現在都立浮間公園には桜草保存園がありますが、これは戦後になって昔の浮間原を懐かしむ地元の人たちが、庭に保存していた株を持寄って植え付けて始まった圃場で、昔浮間原に生えていた様々なタイプの野生品が4月中旬頃に花盛りとなります。上流の埼玉県にある田島ヶ原が特別天然記念物に指定されたことから、埼玉県の県花、さいたま市の市花となりましたが、江戸の街の発展と災害によって盛衰を共にし、江戸人によって園芸草花に育てられたサクラソウこそ、江戸の花であると吹聴したいのです。

### ヤマブキソウ 山吹草

荒川に沿った崖や多摩地域の竹藪に生える多年草で、群生する性質があり4月の花時には一面が真黄色になります。4弁のケシ科で5弁花でバラ科のヤマブキとは類縁が異なりますが、形も色も良く似ています。大震災前の浮間原にもあつたらしく、サクラソウと共に掘り取って家に持って帰ろうとしたら、有毒植物だからよせと大人に止められたという話を聞いています。トリカブトのよ



庭で植えたヤマブキシソウ

うな猛毒ではないもののケシ科の植物には有毒なものも多く、折り取ると橙黄色の汁液が出ていかにも毒々しい感じです。同じケシ科のタケニグサも同じ色の汁液が出て、皮膚につくとただれを起す人もあると聞きますが、食べなければ大丈夫で、見ているだけでは美しい野草です。この植物も東京へ出て始めた見た植物で、昭和33年（1958）4月に初めて浦和の田島ヶ原のサクラソウを見たあと、荒川を渡って志木へ行き、新河岸川に沿った竹藪でヤマブキシソウの大群落に遭遇しました。初めて淡紅色のサクラソウの群生を見たあとに、真黄色の集団を目にしたのですから、この光景は目に焼き付いて忘れられません。

そんなこともあって、私宅の庭には五日市から半世紀前につれてきたヤマブキシソウが、実生株もできて何箇所にも殖えており、サクラソウと花期を同じくしてお互いに引き立てあっています。

3月始めの発芽前に大株を分ければ幾らでも殖えるので、植物園や希望する人にさしあげました。このような野草は適切な手助けをすることで、無限といえるほど殖やすこともできますが、保護活動をされる人の中には、人手を加えることに異をとる方もあります。集落近くの里山に生える野草の盛衰には、少なからず人為的な力が働いており、最低限な手助けは許されて良いのではないかと考えます。

### カワラノギク 河原野菊

多摩川中流の所々、砂利や砂が堆積した中州のような場所に育つ多年草とされますが、多くの株は花が咲くと種子を結んで枯れてしまいます。以

前種子を貰って蒔いてみたところ、1年目は花をつけずに冬越し、2年目の秋に花が咲き種子を結んで枯れました。したがって2年草と理解しています。府中や昭島の河原などにあり、全域で保護されている植物ですが、



カワラノギク

洪水が起きれば砂ごと流されて跡形もなくなってしまいます。河原の植物はたいへん不安定な存在で、前にあったからと行って行ってみると飛鳥川の歌のとおり瀬は淵となり淵は瀬となり、景観が変わってしまいます。流されてなくなるばかりではなく、羽村の玉川上水取入れ堰の対岸にあった保護地は、出入ができないように囲ったために草や木が育ち、日が当らなくなってカワラノギクは消滅しました。実はカワラノギクは新しい砂州ができる真先に種子から育つパイオニア植物で、日当たりよく水はけよく風通しのよいことを好み、他の植物に埋れるような環境になると消滅してしまいます。洪水によって新たな砂州ができるたびに、そこを渡り歩いて子孫をつなげる植物なのです。

関東地方の一部の河原に生えるだけといい、絶滅危惧種に指定される植物ながら、生える環境は不安定で安定すると消滅に向かうという厄介な植物です。河原の植物でこれほど生育地が限られるのが不審で、同類のウラギクのように、大陸のどこかに自生地があつて、渡り鳥によって運ばれてくることも考えられます。

ウラギクは多摩川下流の潮入りの干潟に、時として群生する越年草で立地はたいへん不安定、これも絶滅危惧種ですが、西日本にも生育地が知られ、アジアから欧州・アフリカなど内陸の塩水湖にあり、渡り鳥に運ばれることが知られています。

### オニヤブソテツ 鬼藪蘇鉄

海岸近くの藪陰に生えるシダの一種で、広い裂



オニヤブソテツ (犬吠埼、常緑多年性、日当~半陰地)

片が並んだ葉を放射状に開き、常緑性で濃い緑の艶やかな葉が特徴です。江ノ島や伊豆半島では崖の岩場に生え、中国、ベトナム、インドまであり、欧米では観葉植物として育てられますが、日本では珍しくもないので評価されず、時に庭園の下草として植えられ、私に郷里の家の庭にも植えてあったので、子供の頃から馴染みのシダです。

海岸生のシダですが都内の各地で、宅地や川の石垣で育つのが見えます。飯田橋から早稲田、高田馬場には神田川に沿って崖地が多く、このあたりを歩くといたるところで見られます。庭に植えられたものが自生化したというよりも、古くに海が内陸まで入り込んでいた時代に生えていたものが、そのまま残っていると考えます。古い地割がそのまま残され、このような植物が育ち続けることができるのでしょうか。同じような例では、矢張り海岸の植物であるラセイタソウが、御茶ノ水の川べりに生えており、海辺であった時代の名残を残していると思います。

### タシロラン 田代蘭

関東から西、沖縄から熱帯アジア、豪州、アフリカまで分布する腐生ランで、林下の腐植を栄養として根株が育ち、葉はなく花茎だけを出す植物です。琉球や台湾の植物を研究した田代善太郎という人が最初に見つけたので、この名がついています。このような南方の植物が東京に生えるとは誰も思わず、葉が茂るわけでもないのが気づかなかったのですが、なんと明治神宮の林に群生していたのです。私が始めて見たのは2009年6月22日でしたが、専門の研究者はもっと前から知っていたようでした。翌2010年6月には私



タシロラン (明治神宮)

たちが運営している植物愛好会で観察会を催し、会員にこの珍しい植物を紹介しました。東北の代々木門の守衛所から奥の小道に入ると、林下の落葉の間から20~30cmの茎が立ち上がり、数個の花と蒼をつけています。全体が白いので薄暗い樹下でも目立ち、道を辿ると先の方まで続きます。参加者は細めのアスパラガスのように見えると感想を述べました。白いのは無色ということで、葉緑素を持たないためです。

どうして神宮の林にこのような植物が生えるのかといえば、どこからか種子がもたらされたからです。思い当たるのは、神宮の造成時に全国から樹木が献木されたことで、森ができて環境が整ったことで眠っていた種子が芽生えたものかと思えます。造営は大正4年(1915)頃から始まったと聞きますので、100年以上も種子が発芽力を失わずに生きていられるかどうかという問題もあります。ずっと早くから育っていたものが、森が安定したことで大繁殖したとも考えられます。近年の温暖化で、暖地の植物が北日本に分布を広げているという研究報告もあります。これまで武蔵野には見られなかった植物が、新しい一員として参入した事実をご紹介します、生き物の世界は環境の変化にともなって適応した絶滅にいたることを理解したいと思います。



鳥居恒夫著『花図鑑桜草』

夜来香とボタニカル・スケッチ

鳥居 恒夫

学生のごろ植物学の教えを受けた渡辺清彦先生は、野外でも新たな植物を見つけると、その場でスケッチをされました。「植物を理解するには、写生図に及ぶものなし。」というのが信念だと言われ、私たちにも勧められました。描ける自信がありませんでした。先生は競争中にペナン植物園長として赴任され、公務の余暇に2200名の植物を描かれたようですが、敗戦により持ち帰ることができず、その後親交のあった熱帯植物の植栽コーナー先生の尺力で返還をうけられました。

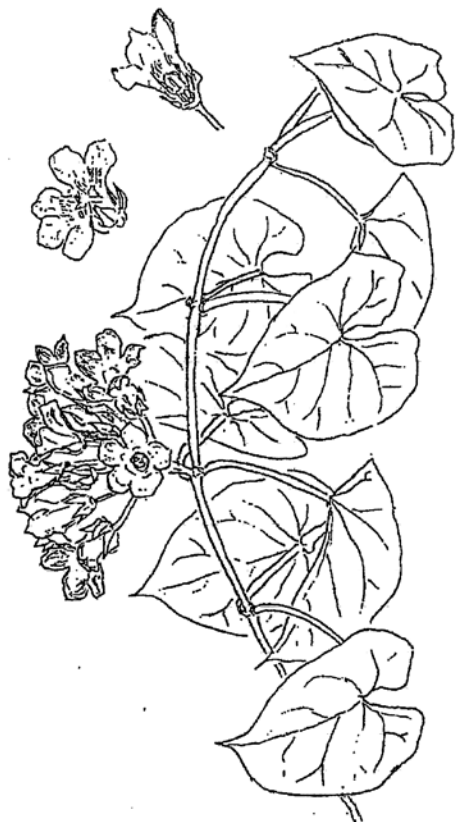
私たちにはその図を見せて講義をされました、あるときこれが本物の夜来香（イエイライシヤン）だと一図を示されました。これを忘れないでいたことが、私の人生に大きな影響を与えたことになったのです。

東京都の神代植物公園で仕事ができるようになり、植物園協会の手務局のお手伝いもしていたことから、1970年の第一回海外植物調査隊の一員に選ばれて、タイ国へ行く幸運を得ました。このときバンコクで夢に見た夜来香を見つけ、持ち帰ることができました。それから月日は流れ、やっとできた大温室で夜来香の花が咲き、本邦初公開とニュースに流れたのは1985年8月のことでした。この間15年も経過したのが話題性を高め、私の顔がテレビや新聞に出る大騒ぎとなりました。これによって多くの方に知っていただくことが、それからの植物園活動に大きく役立ったという、忘れることのできない植物なのです。

20代までは一度見ただけで覚えられていたのに、1999年に退職する頃から、老化のためか新しい植物が覚えられなくなってきました。そこで思い出したのが、渡辺先生から勧められた植物の写生図です。初めて画用紙に鉛筆で描いてみると、およそ図にはなりません。それでもよく観察を繰り返して描いているうちに、形になってきたのが嬉しく、数が増える楽しさで続き、2015年春現在4800点を越えました。野生植物から栽培植物まであらゆる植物を描こうとしてきたので、自分の植物資料となってきました。

描いてみてわかったことは、それまで実はいいかげんに植物を見ていたということでした。他人に見せようと描くものではないので、下手でもかまわない。よく見ればどんな植物でも、誰でも描けます。ボタニカル・スケッチと名付けて、今では私が若い人たちに勧めることとなりました。

できるだけ現地で、短時間に要点をスケッチし、観察メモを余白に入れます。上手に見せようと直してばかりいると描けません。続けてゆけば、きっと上達できるはずですよ。



黄色のバラに青臭さを加えたような香りと表現され 昼間も発散される

Telosma cordata ガダイモ科

夜来香 (イエイライシヤン) トンキンカヅラ

中国南部〜インド原産のつる性多年草、日本では温室で冬越しさせる。葉は対生、夏から初秋に上部の節に花房がつき、20mm程の黄色花を開き、強い香りを放つ。歌謡曲で名高い夜来香だが異品が多く、これこそが本物である。1970年に鳥居がタイ国から神代植物公園に持ち帰り、85年に大温室で花と香りが初公開となった。

神代植物公園 031002 描

鳥居 恒夫

〒187-0034 東京都小平市栄町 3-14-2

電話・Fax 042-345-1556

植物・園芸研究家 (ほかに表現ができません)

東京都神代植物公園・夢の島熱帯植物館 O.B.

日本植物園協会 名誉会員

学芸員 1970年 認定

園芸団体「さくらソウ会」世話人代表